WORK MILL Research

2018 Vol.0 「はたらく」を科学する

これからの
働き方って
なんだろう？

働く場に
できることって
なんだろう？

「はたらく」を科学する。
オカムラからのレポートです。

いま、「働き方改革」に大きな注目が集まっています。
これからの働き方を探る上では、生産性を高める仕組みづくりや
意識の改革など、さまざまなアプローチが考えられますが、
「働き方」に密接に関係のある「働く場（ワークプレイス）」を
どう設計していくのか、
という視点も大切なポイントだと考えます。

オカムラでは、働き方の実態を明らかにし、
働く場にできることや課題を探究し続けています。

その手法は、働く人の意識やニーズを科学的に
リサーチすることからスタート。
実証的なアプローチで集積したデータに基づき、
働き方と働く場の関係、
さらにはさまざまな経営課題とオフィス環境の
関係を紐解いていきます。

「はたらく」を科学する。オカムラからのレポート。
今回はそのはじめの一歩です。

オフィスは、働く人のパフォーマンスをどのようにサポートしているのか？

働く人のパフォーマンスを高めるために
「オフィスにできること」を明らかにすることをめざし
働く人たちにアンケート調査を実施。
その結果を分析し、オフィスの有効性や可能性、
これからの課題を探究しました。

働き方の実態を調査・分析

主にこんなことを聞きました

- あなたは普段、どんな場所で働いていますか？
- 働く上で、どんな「活動」「空間」「サービス」を重要視していますか？
- 経営課題の解決に、オフィス環境は影響していると思いますか？

これからの働き方をサポートするために
オフィスにできることや課題を探究

CONTENTS

01 複数の場所で働く人が登場

>>> モビリティ別 働き方のタイプ 05
>>> 働く場所 07
File-1 | 「はたらく」を科学する ABWの効果に関する研究
>>> 働く場所と時間 09
File-2 | 「はたらく」を科学する 柔軟な働き方に関する研究

02 多くの人が重要視する活動・空間・サービス

>>> 重要視する活動 11
File-3 | 「はたらく」を科学する 集中を支援するイスの研究
>>> 重要視する空間 13
File-4 | 「はたらく」を科学する 集中と交流に関する研究
>>> 重要視するサービス 15
File-5 | 「はたらく」を科学する 個人の保有文書に関する研究

03 モビリティ別 重要視する活動・空間・サービス

>>> モビリティ別 重要視する活動 17
>>> モビリティ別 重要視する空間 19
>>> モビリティ別 重要視するサービス 21

研究の現場から

File-6 | 「はたらく」を科学する オフィスデータ調査 23
File-7 | 「はたらく」を科学する 製品の研究開発 24

04 経営課題に対するオフィス環境の影響

>>> 経営課題とオフィス環境 25
File-8 | 「はたらく」を科学する オフィス環境が経営課題に与える影響を研究

オカムラの研究アプローチ 27
調査のまとめとこれから 29

01

働く場所の柔軟性、モビリティの高さに着目し、働き方のタイプを整理しました。

活動に応じて場所を選んだり調整したりする働き方「Activity Based Working (ABW)」や、情報通信技術を活用した場所や時間にとらわれない働き方「テレワーク」への関心が高まっています。このような動向を踏まえ、働く人に「普段どんな場所で働いているか」を調査すると、「決まった場所で働く人」が多数派ですが、「いろいろな場所で働く人」も登場してきていることがうかがえました。働き方のタイプを「働く場所の選択肢の多さ」という、モビリティの高低で分けてみると、職業や年齢など、これまでの分類では見えなかったニーズや傾向を発見できます。

モビリティ別 タイプの分け方

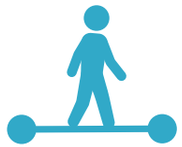
オフィスの中でのモビリティ。オフィスの外でのモビリティ。その両方を調査・分析した結果を融合し、モビリティ別のタイプを分けました。

M1 モビリティ1 一つの場所で働く

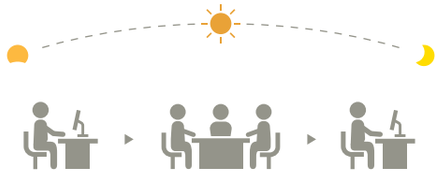
全体の 43%

仕事の多くを自分のデスクで行い、オフィスの中を動くこともあまりありません。
経理・財務や総務部門の方に多くみられます。このタイプは全体の約4割を占めています。

M2 モビリティ2 ほぼ決まった場所で働く

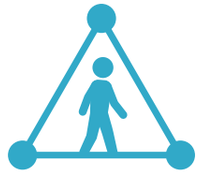


全体の 40%

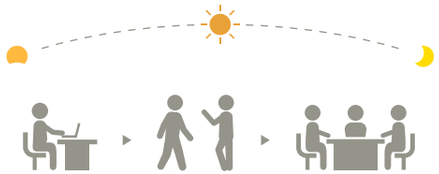


自分のデスクにいることが基本ですが、打ち合わせのために会議室を利用したり
外出することもあります。現在の典型的な働き方、全体の4割を占めています。

M3 モビリティ3 決めている複数の場所で働く



全体の 10%



デスクを中心に会議室やミーティングエリアなども頻繁に利用。また外出の機会も多く、
家で仕事をすることもあります。営業部門によくみられるタイプです。

M4 モビリティ4 いろいろな場所で働く

全体の 7%

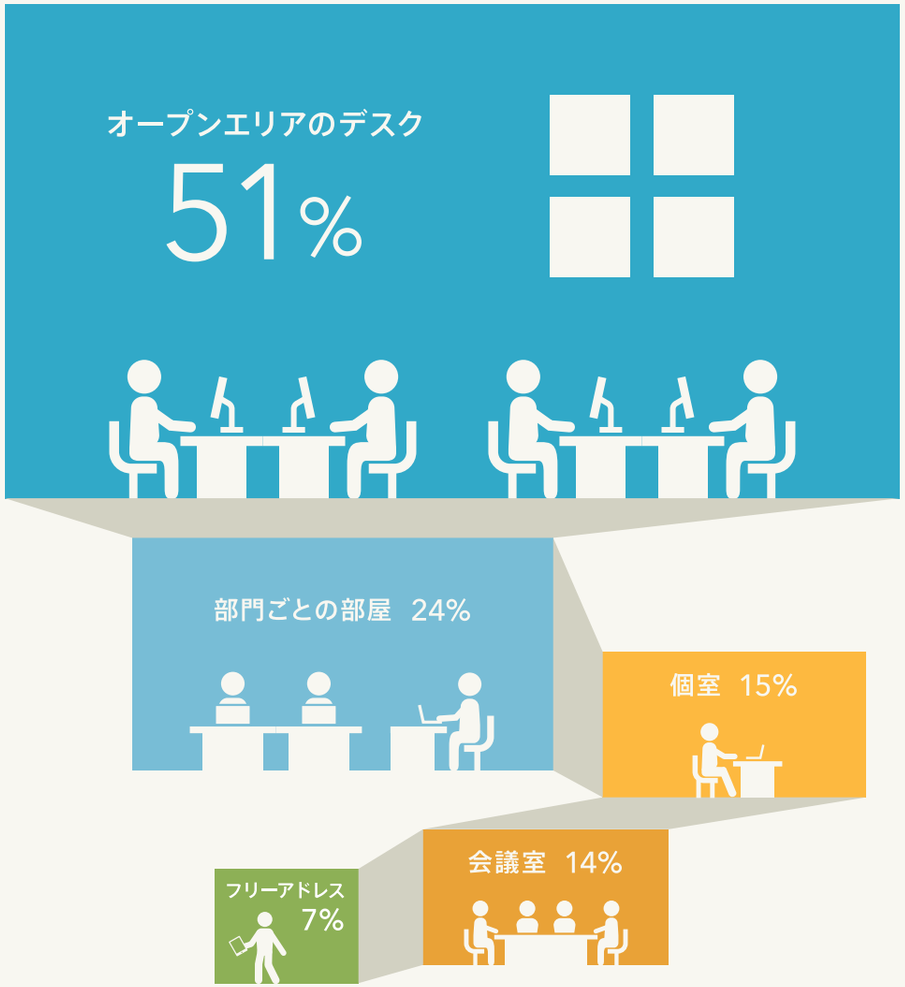
デスクやオフィスにとどまらず、仕事に合わせて、さまざまなスペースを利用します。
全体の7%と少数派ですが、今後、増えていくことが予想されます。

調査方法および回答者属性についてはP30をご覧ください。

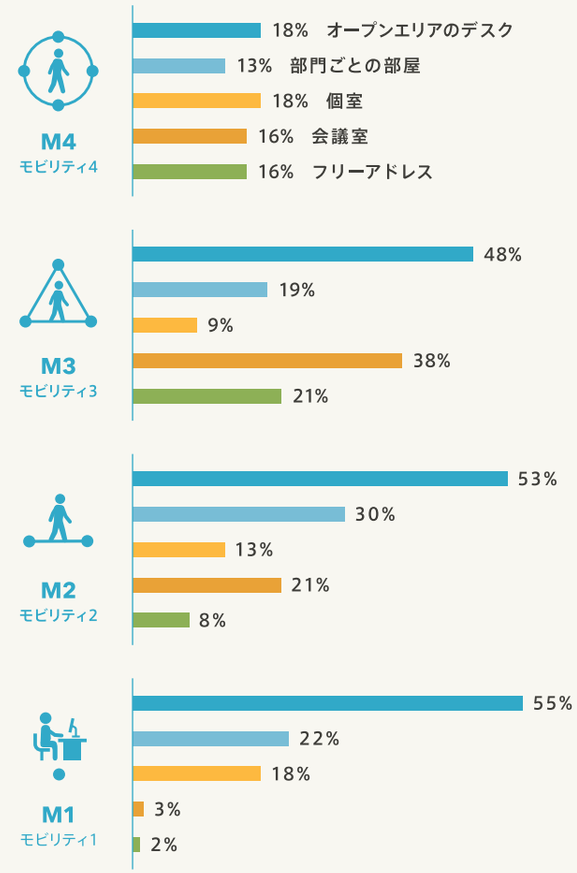
モビリティが高くなるにつれて、オフィスの中で利用する空間が増える傾向にあります。

モビリティが低い人はデスク中心で過ごしているのに対して、高い人はさまざまな空間をバランスよく使いながら過ごしていることがわかりました。これまでの研究により、多様な空間を使って働くABWを実践している人の多くは、その効果を実感していることもわかっています。

Q あなたは、オフィス内のどこでよく仕事をしますか？



モビリティ別の割合



従業員数別 TOP 5

11～100人

1. オープンエリアのデスク
2. 部門ごとの部屋
3. 個室
4. 会議室
5. フリーアドレス

101～1000人

1. オープンエリアのデスク
2. 部門ごとの部屋
3. 会議室
4. 個室
5. フリーアドレス

1001人以上

1. オープンエリアのデスク
2. 会議室
3. 部門ごとの部屋
4. 個室
5. コラボレーションエリア

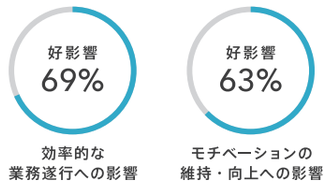
規模の大きなオフィスでは、
コラボレーションエリアも仕事の場として
利用されているようです。

File-1 | 「はたらく」を科学する

ABWの効果に関する研究

オカムラのラボオフィス「CO-Dō LABO」では、そこで働く人自らがABWを実践しています。意識調査の結果、全体の約7割がABWは効率的な業務遂行に好影響を与えていると回答。仕事に対するモチベーションの維持・向上に関しても6割が好影響と答えるなど、多くの人が効果を実感しています。

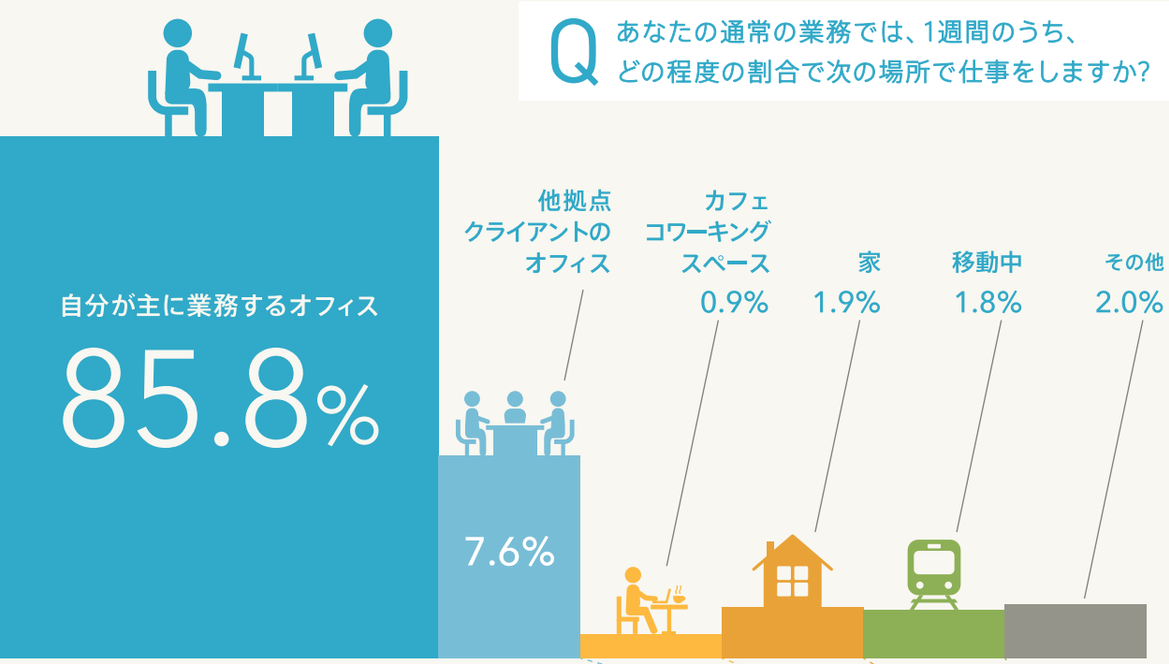
■ABWに関する意識調査



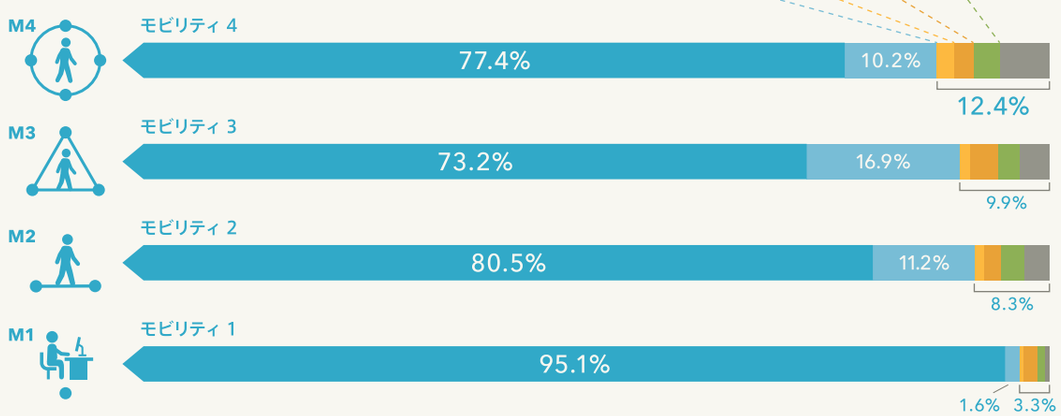
オフィスで働く人が多数を占めるなか、オフィスの外で働く人も少しずつ増えています。

通常の業務では、平均で９割以上の時間をオフィスで費やしていることが判明。一方でモビリティが高くなるにつれ、街中や自宅で働く機会も増えています。時間や場所を選ばない柔軟な働き方は、急速に進展しつつあります。

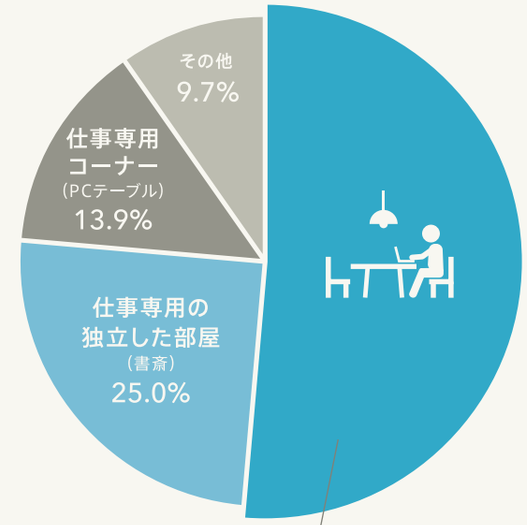
Q あなたの通常の業務では、1週間のうち、どの程度の割合で次の場所で仕事をしますか?



モビリティ別の割合



Q 在宅勤務の場合、どのような場所で最もよく仕事をしますか?



仕事用ではないスペース
(ダイニングテーブルなど)

51.4%

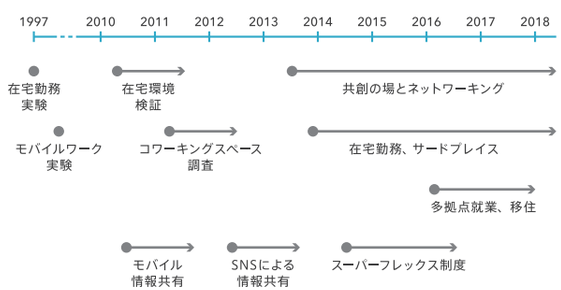
在宅勤務では、半数が仕事用ではないスペースをよく利用しています。
管理職以上、50代は仕事用の場所がある人が多いようです。

File-2 | 「はたらく」を科学する

柔軟な働き方に関する研究

オカムラでは、時間・空間・作業の自由度を適切に設定して、生産性を高めて暮らしの充実も図る柔軟な働き方を20年以上研究しています。2018年は、総務省など6省合同のテレワークデイズに併せて、柔軟な働き方が与える影響の調査を実施。働く人からは、集中や交流といった「生産性向上」に結びつく要素がメリットとして挙げられています。

■主な研究テーマ



■柔軟な働き方によるメリット

	自宅	自社サテライト拠点
肉体的疲労軽減	23.1%	20.2%
集中して作業	16.1%	17.7%
作業効率が向上	12.4%	15.3%
他拠点の社員と交流	0.2%	17.7%

02

多くの人は、業務のパフォーマンスを上げるために、個人で行う作業を重要視しています。

働く人が重要視する活動の上位には、年代・役職に関わらず個人の活動に関するものが占めており、仕事の基本は個人作業であることがうかがえます。その一方で、個人作業に対する会社のサポートの評価が低く、オフィスを提供する側と使う側の意識に差があるようです。個人の能力をいかに引き出すかが、オフィスの課題であることが改めてわかりました。

年代別 TOP 5

20代
1. 個人で集中作業をする
2. 電話をする
3. くつろいで休憩する
4. 個人で通常のルーチンワーク
5. 相談する・相談にのる

30代
1. 個人で集中作業をする
2. 個人で通常のルーチンワーク
3. 読む・調べる・閲覧する
4. 個人でじっくりと考えをめぐらせる
5. 電話をする

40代・50代
1. 個人で集中作業をする
2. 読む・調べる・閲覧する
3. 個人でじっくりと考えをめぐらせる
4. 電話をする
5. 相談する・相談にのる

役職別 TOP 5

経営者・役員
1. 個人で集中作業をする
2. 個人でじっくりと考えをめぐらせる
3. 読む・調べる・閲覧する
4. 思い立った時にさっと打ち合わせる
5. 相談する・相談にのる

管理職
1. 個人で集中作業をする
2. 個人でじっくりと考えをめぐらせる
3. 電話をする
4. 読む・調べる・閲覧する
5. 相談する・相談にのる

一般社員
1. 個人で集中作業をする
2. 読む・調べる・閲覧する
3. 個人で通常のルーチンワーク
4. 個人でじっくりと考えをめぐらせる
5. 電話をする

20 代では「くつろいで休憩する」が上位にランクイン。
2 位以下は年代や役職によってさまざま。個人の活動に対する多角的な視点も必要です。

File-3 | 「はたらく」を科学する

集中を支援するイスの研究

オカムラでは、多様性の中で個人の能力を最大限引き出すオフィスづくりをさまざまな角度で検証しています。例えば、オフィス内で実現できる最小スペースの集中環境を研究。周囲からの視線と音を遮断するために、ヘッドレストの周囲に簡易的なパネルを装着したイスを開発しました。その結果、頭部を囲うだけでも、集中が得られることがわかりました。

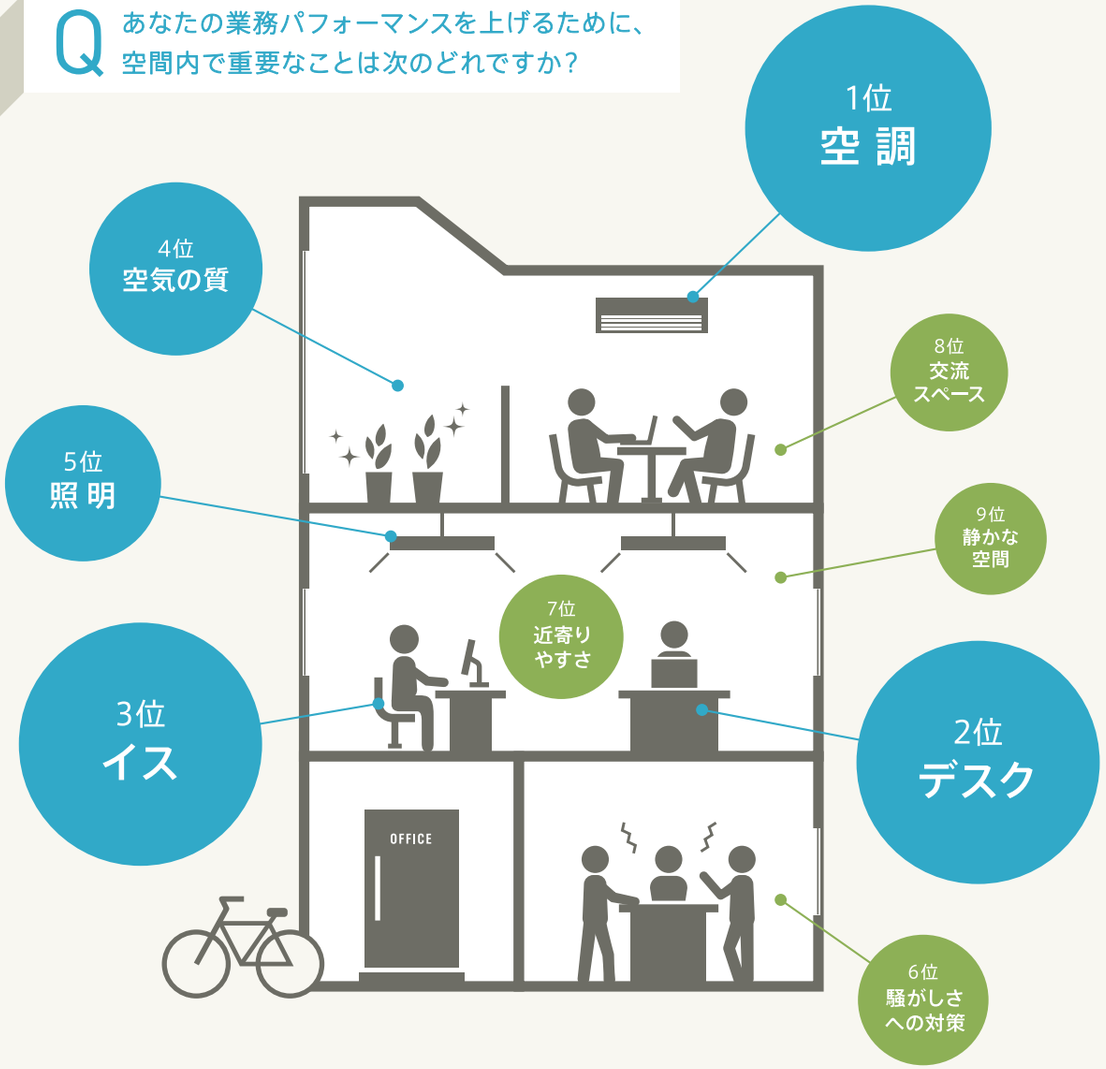
「仕事に集中しやすくなった」 77%

Work Veil

多くの人は、業務のパフォーマンスを上げるために、身のまわりの空間を重要視しています。

働く人の多くは、身近なデスクやイス、空調の状態がパフォーマンス向上に必要なことと感じています。また、個人の「集中」と、他者との「交流」という、相反する要素も重要視されており、それぞれの課題に応える空間づくりが求められていることが改めてわかりました。

Q あなたの業務パフォーマンスを上げるために、空間内で重要なことは次のどれですか?



身のまわりに関する事項　「集中」と「交流」に関する事項

年代別 TOP 5

20代

1. デスク
2. 休憩や飲食、または交流するスペース
3. イス
4. 空調
5. 空気の質(清浄さ)

30代

1. 空調
2. デスク
3. イス
4. 空気の質(清浄さ)
5. 上司・同僚への近寄りやすさ

40代・50代

1. 空調
2. デスク
3. イス
4. 空気の質(清浄さ)
5. オフィス照明

役職別 TOP 5

経営者・役員

1. 空調
2. デスク
3. イス
4. 1~2人で作業するための静かな空間
5. 休憩や飲食、または交流するスペース

管理職

1. 空調
2. デスク
3. 会議室数
4. イス
5. オフィス照明

一般社員

1. 空調
2. デスク
3. イス
4. 空気の質(清浄さ)
5. オフィス照明

20代では、「休憩や交流するスペース」など、身のまわりの空間以外への要求もみられ、40代・50代では、「オフィス照明」への配慮も重要視しています。

File-4 | 「はたらく」を科学する

集中と交流に関する研究

上記の調査から、オフィスにおける個人の集中と他者との交流は、どちらも重要であることがわかりました。オカムラでは、それぞれの環境を調査し、居心地のよい場所の必要条件を研究しています。今回の調査でも同様の傾向がみられ、これまでに得られた成果は、オフィス環境づくりの指針として役立てています。

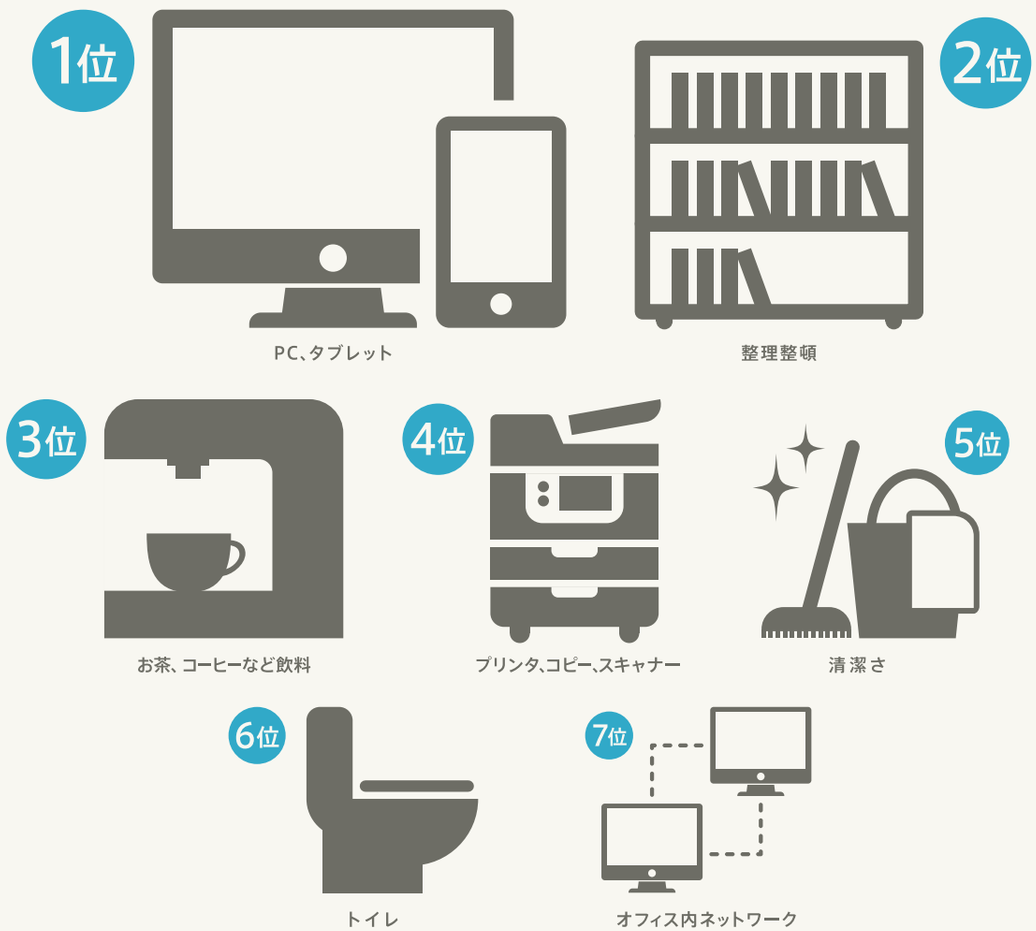
■居心地のよい場の必要条件 TOP10

集中 ひとりで考え事をする	交流 メンバーと会話する
快適な温度・湿度	快適な温度・湿度
適度な明るさ	適度な明るさ
適度な他者との距離感	適度なにぎわい
他者の視線が気にならない	適度な他者との距離感
座り心地のよいイス	気の合う人がいる
静か	座り心地のよいイス
自然光が入る	飲食できる
緑や自然が見える	自然光が入る
楽な姿勢がとれる	緑や自然が見える
適度な囲われ感	作業面の広いテーブル

業務のパフォーマンスを上げるために重要視しているサービス・設備は、働く人の年代ごとに異なります。

コンピュータ関連の重要性は、年代差がはっきり表れる結果に。上位に「整理整頓」や「清潔さ」が入っており、空間づくりだけではなく、書類などの運用の実態を検証することがますます必要になっています。

Q あなたの業務パフォーマンスを上げるために、重要なサービス・設備は次のどれですか？



年代別 TOP 5

40代・50代は、「PC、タブレット」が1位。
20代は「お茶、コーヒーなど飲料」で、重要視する内容がそれぞれ異なります。

20代

1. お茶、コーヒーなど飲料
2. オフィス内ネットワーク
3. アクセス（エレベータ、階段など）
4. カフェ・食堂
5. トイレ

30代

1. 清潔さ
2. 整理整頓
3. PC、タブレット
4. お茶、コーヒーなど飲料
5. プリンタ、コピー、スキャナー

40代

1. PC、タブレット
2. お茶、コーヒーなど飲料
3. プリンタ、コピー、スキャナー
4. 整理整頓
5. オフィス内ネットワーク

50代

1. PC、タブレット
2. 整理整頓
3. プリンタ、コピー、スキャナー
4. お茶、コーヒーなど飲料
5. 清潔さ

男女別 TOP 5

男女ともに「整理整頓」に対する要望が高い傾向にあります。

男性

1. PC、タブレット
2. 整理整頓
3. プリンタ、コピー、スキャナー
4. お茶、コーヒーなど飲料
5. オフィス内ネットワーク

女性

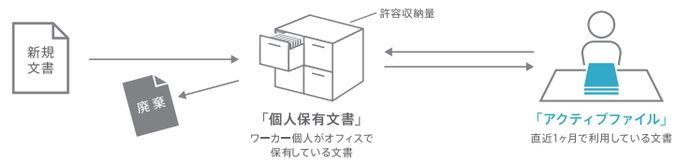
1. 整理整頓
2. お茶、コーヒーなど飲料
3. 清潔さ
4. プリンタ、コピー、スキャナー
5. トイレ

File-5 | 「はたらく」を科学する

個人の保有文書に関する研究

オフィスの整理整頓というと、共有の書庫スペースを部門別に割り振ったり、半期に一度棚卸をしたり、さまざまな運用がみられます。その一方で、個人が作成している文書の運用実態については明らかになっていません。オカムラでは、個人が日常的に利用している「アクティブファイル」に着目。その運用実態を探り、働き方に応じた収納方法を検証し、整理整頓しやすいオフィスづくりの提案に役立てています。

■アクティブファイルの位置づけ



03

モビリティが高い人は、さまざまな人と関わりながら成果を生み出す活動を重要視しています。

モビリティが高い人は個人での活動の割合が減る傾向にあります。その一方で、「プレゼンテーション」や「思い立った時にさっと打ち合わせる」など、さまざまな人と関わりながら成果を生み出すための活動の割合が高くなっています。

Q あなたの業務パフォーマンスを上げるために、重要な活動は次のどれですか?

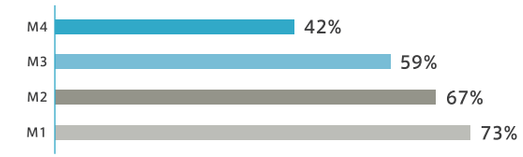
プレゼンテーションする

お客様をもてなす

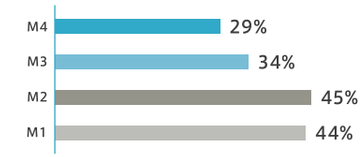
思い立った時にさっと打ち合わせる

秘匿性の高い話をする

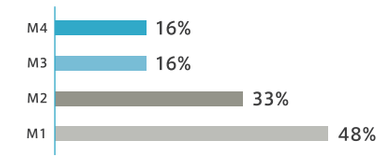
個人で集中作業をする



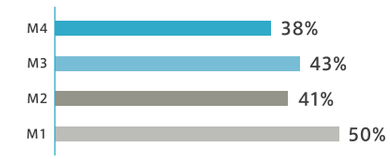
個人でじっくりと考えをめぐらせる

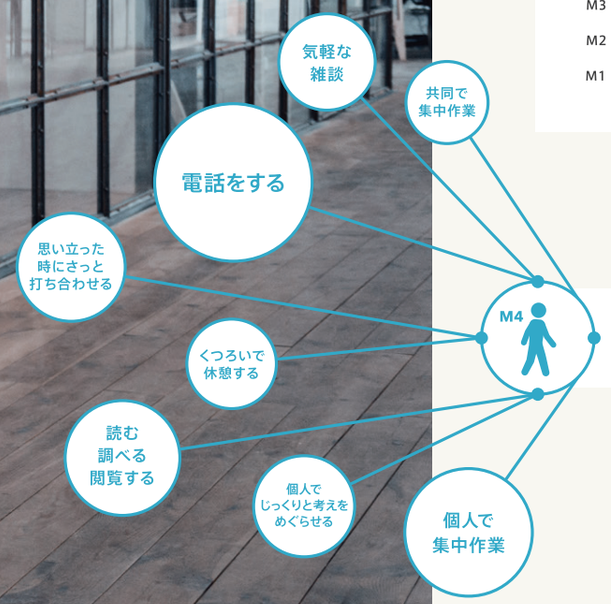


個人で通常のルーチンワークをする



読む・調べる・閲覧する





モビリティが高くなると、
重要視する活動は多岐にわたります。

M4:モビリティ4　M3:モビリティ3　M2:モビリティ2　M1:モビリティ1

モビリティが高い人は、目的に沿った成果を出せる空間を重要視しています。

モビリティが高い人は活動の種類が増えることで、その空間で目的に沿った成果を出せるかどうかへの関心が強くなっています。その傾向は「ワークスペースの選択肢の多さ」や「打ち合わせコーナーの数」など、実質的な面を重要視している点にも表れています。

Q あなたの業務パフォーマンスを上げるために、空間内で重要なことは次のどれですか?

ワークスペースの選択肢の多さ

休憩や飲食、または交流するスペース

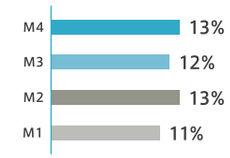
モビリティが高い人は、
休憩や飲食·交流スペースより、
ワークスペースの選択肢の多さを
重要視しています。

十分な打ち合わせコーナー数

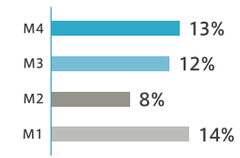
十分な会議室数

モビリティが高い人は、
会議室より、思い立った時に
さっと話ができる打ち合わせコーナーを
重要視しています。

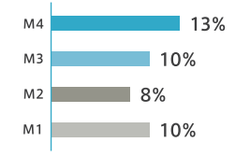
立ち作業もできるデスク·テーブル



イスの高さ等を自分に合わせて調整できる



インテリアデザイン(内装·色彩·素材)



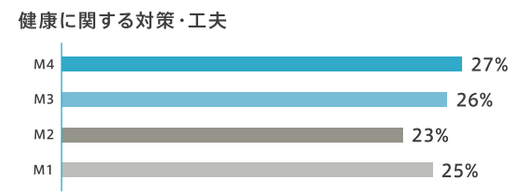
モビリティの高さにかかわらず、
働く人は家具の機能性やインテリアの
デザイン性を求めています。

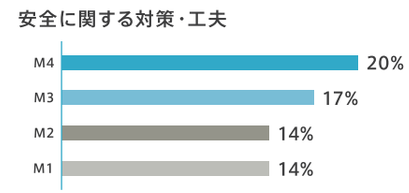
M4:モビリティ4　M2:モビリティ2
M3:モビリティ3　M1:モビリティ1

モビリティが高い人は、さまざまな場所で働くためのサービス・設備を重要視しています。

モビリティが高い人は、オフィスの外で働くために必要な通信設備サービスの重要性が高くなる傾向にあります。併せてカフェなどのサービスへの関心も高く、さまざまな場所で働く意識が表れています。

Q あなたの業務パフォーマンスを上げるために、重要なサービス・設備は次のどれですか？





健康や働く環境の安全に対してはどのモビリティの人も高い関心があります。

M4:モビリティ4　M2:モビリティ2
M3:モビリティ3　M1:モビリティ1

File-6 | 「はたらく」を科学する

オフィスデータ調査

オフィス空間のベンチマークとなる定量的なデータを提供

お客様が自ら情報を集めることが難しいオフィスの面積や会議室の数、
家具占有率などのデータを集計・分析し、公表しています。

これまでの研究｜オフィス空間を科学的に見える化

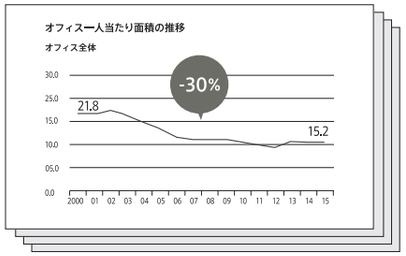
1986年以降、オフィスの変遷を定量的に把握するため、オフィスの一人当たり面積や会議室の数などオフィスデータの調査を継続して行い、分析しお客様に提供しています。自社のオフィスが世の中と比べてどうか、オフィスを科学的に考える方法を支援しています。

研究のこれから｜ビッグデータとの連携をめざす

面積などの空間的なデータだけでなく、活動データや生体データなど、オフィスに関するさまざまなビッグデータとの連携を図り、定性的な評価に陥りがちなオフィスを、定量的かつ多面的に評価する糸口となるデータの活用をめざしています。

オカムラの調査の特徴

この調査データは、面積や会議室の数のほかに、オカムラ オリジナルの指標として、家具の密度感を評価する「家具占有率」を算出しており、一人当たり面積と併せたオフィス評価をご提案しています。特にオカムラの調査は、日経ニューオフィス賞への応募資格を満たした、優良なオフィス（2017年は158件）を調査対象としており、ベンチマークとして有用なデータとなっています。



オフィス一人当たり面積の推移（2000～2015）

具体的なデータにご関心のある方は、以下のＨＰより、
お問い合わせください
■ http://workplace.okamura.co.jp/solutions/download/

File-7 | 「はたらく」を科学する

製品の研究開発

安心・安全に移動できるイス「ウェルツ セルフ」の開発

これまで隠れていたニーズに着目し、製品を企画。大学、専門機関と共同で
研究開発を行いました。製品化にあたっては、
移動や安全性に関する科学的な検証を繰り返しました。

Weltz-self

多様な働く人へオカムラの提案

少子高齢化が進む中、下肢の機能が低下した高齢者や障がい者の社会進出が増えています。座ったままの姿勢で自身の足を使い、歩くように移動できるイスを開発しました。
オフィスや工場などの働く場だけでなく、美術館や図書館などの公共施設でも、多様な人々の移動をサポートします。

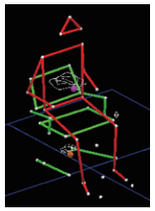
専門機関との共同研究による開発

本開発は2012年にスタート。オカムラは、国立大学法人佐賀大学、神奈川県総合リハビリテーションセンター、日進医療器株式会社と共同研究を行い、車椅子の技術を開発に応用しました。

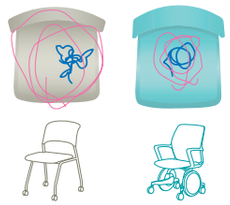
okamura
- 神奈川県総合リハビリテーションセンター
- 国立大学法人 佐賀大学
- 日進医療器株式会社

旋回性能などさまざまな検証を実施

見た目ではわからないウェルツセルフの走行性能や旋回性能を科学的に検証。その研究成果は日本リハビリテーション工学協会の「リハ工学カンファレンス」でも発表しています。



姿勢計測例



4本脚　ウェルツ セルフ

椅子中心
身体重心

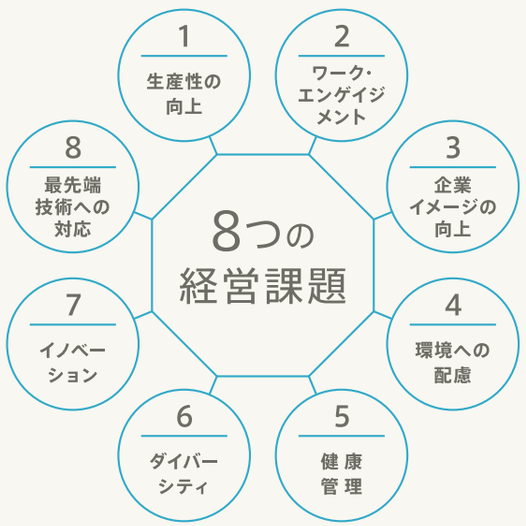
［受賞］
ドイツ「UNIVERSAL DESIGN EXPERT 2018」
日本「2018年度グッドデザイン賞」

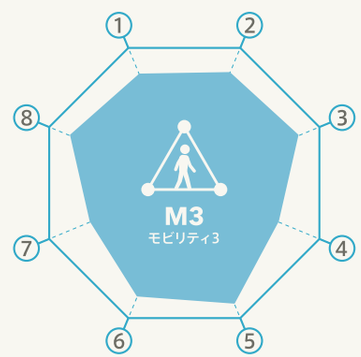
GOOD DESIGN

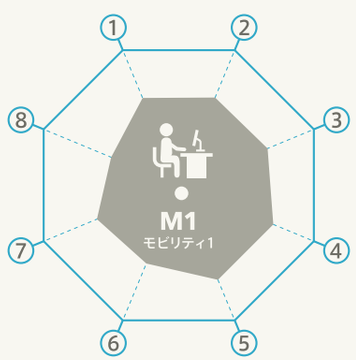
04 モビリティが高い人は、オフィス環境が経営課題に対して影響を与えると感じています。

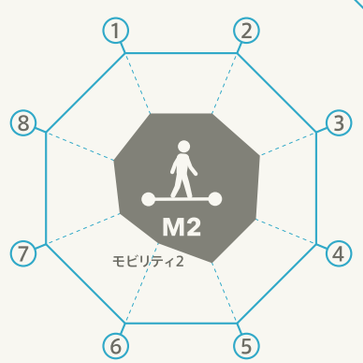
モビリティが高い人は、成果を出せる空間や設備・サービスを重要視しているため、経営課題に対してオフィスが果たす役割を大切に考えています。いろいろな場所を自ら選んで働くため、オフィス環境について考える機会も多く、経営課題に対する意識も高まる傾向にあることが推察できます。

Q 8つの経営課題に対して、オフィス環境がどのくらい良い影響を与えると思いますか？





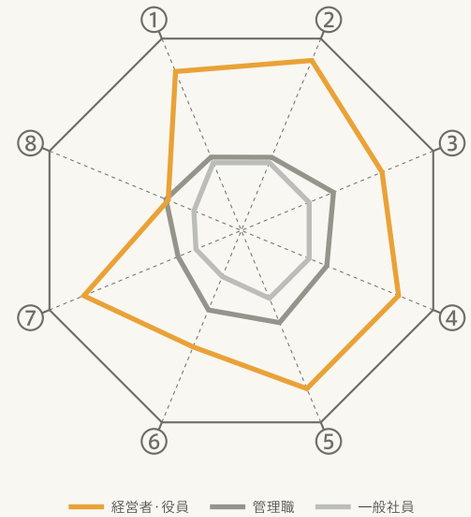




モビリティが高い人は、特に「ダイバーシティ」や「ワーク・エンゲイジメント」「企業イメージの向上」に良い影響を与えると感じています。

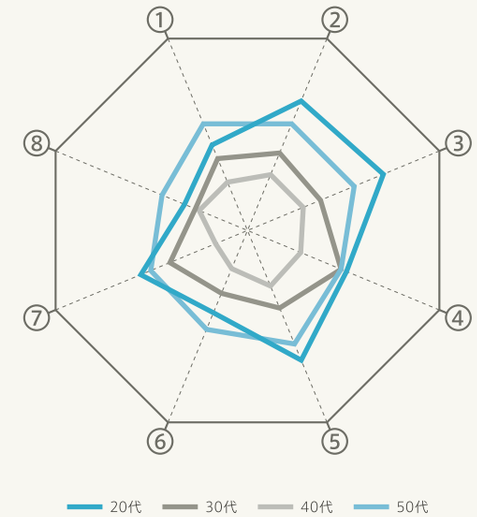
ワーク・エンゲイジメント：働く人が仕事に対して誇り（やりがい）を感じ、熱心に取り組み、活力を得ていきいきと働く個人の状態のことをいいます。

職位別の比較



経営者・役員など、職位が上がるにつれてオフィス環境が経営課題に対して良い影響を与えると感じています。

年代別の比較



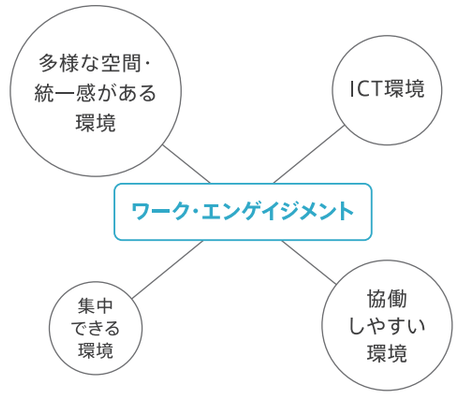
20代・50代は、他の世代に比べて、オフィス環境が経営課題に対して良い影響を与えると感じています。

File-8 「はたらく」を科学する

オフィス環境が経営課題に与える影響を研究

オカムラは経営学組織論の専門家である稲水伸行准教授（東京大学）と共同で、オフィス環境〈ハード面〉の改善が働く人の心理や組織パフォーマンス〈ソフト面〉に与える影響を研究しています。例えば、近年注目されている「ワーク・エンゲイジメント」については、オフィスのデザイン的要素（色彩など）や場の選択肢（ABW）など、多様性の有無が仕事への熱意や組織への参画意識と関連があることが明らかになってきました。

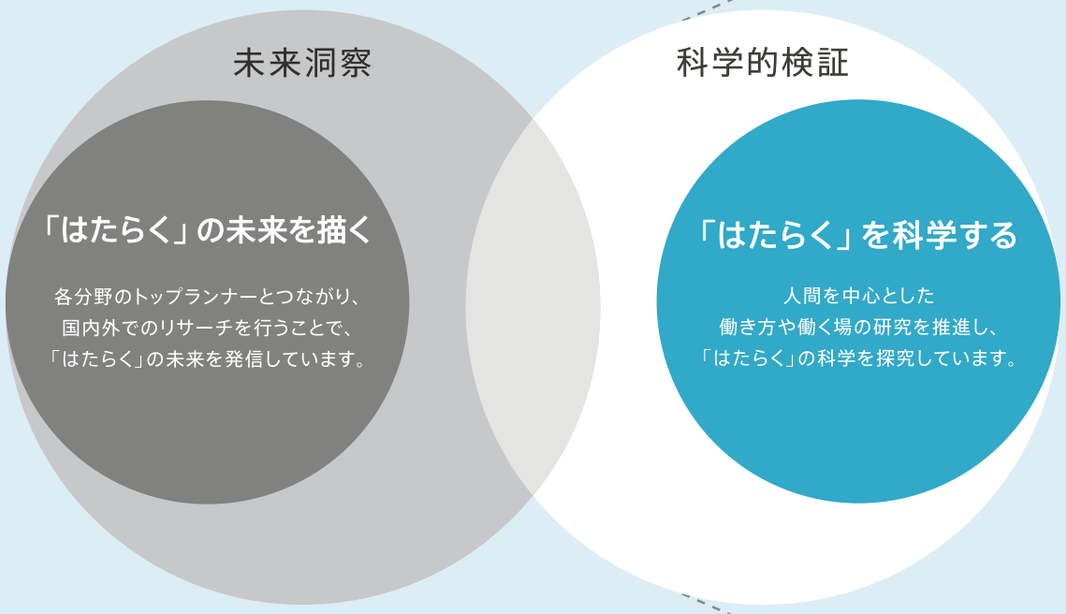
■オフィス環境とワーク・エンゲイジメントの関連性



※円の大きさは関連性の強さを示します。

私たちは、「未来洞察」と「科学的検証」を行いながら、これからの「はたらく」を追求しています。

オカムラは、一歩先の「はたらく」を追い求めています。これからの「はたらく」を可視化するエビデンスの蓄積、その働き方を実現するための“モノ”の企画、そしてその活動を幅広く広めていくコミュニケーションを行っています。



社会の動向や人々の意識変化をつかみ、そこに研究テーマを見つけ、「はたらく」の課題に迫まります。大学・研究機関など多彩な専門分野の研究者とともに活動し、お客様のニーズに応えていきます。

調査のまとめとこれから

「働き方改革」が推進される中、場所や時間にとらわれない
柔軟な働き方のさまざまな取り組みが実施されています。

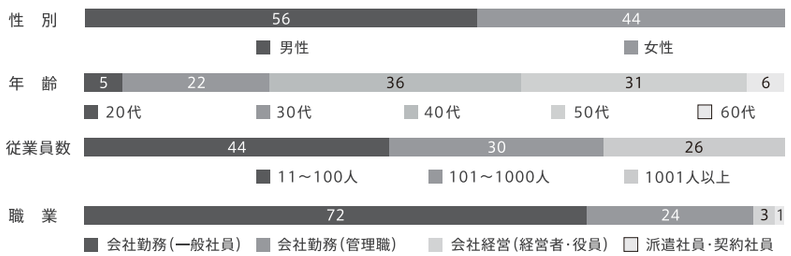
今回の調査では、場所を選択しながら
働く人（モビリティの高い人）はまだ少数であるものの、
その人たちの志向は他の働き方の人と異なることがわかりました。
モビリティの高い人たちは、きっちりと成果を出せる活動やスペースを
重要視しており、オフィス環境が経営課題に良い影響を与えると
感じながら仕事をしている姿が見えました。
ここから、さまざまな働き方を推奨し、それに適した場所を提供することで、
経営課題に対するオフィスの有効性を高めることが
できるのではないかという方向性を見出すことができました。

その一方、多くの人は自分のデスク周辺のみで仕事をしており、
モビリティが低いこともわかりました。
このタイプの人たちは集中する、じっくり考えるといった個人のための活動、
スペースを重要視しており、個人の能力をベースにした組織力の向上という
視点も必要であるということがあらためて見えてきました。

オカムラは今後も今回のような、調査・分析を通じて、
広く社会の動向を見つめ、お客様のニーズや課題を事実とデータでつかみ、
研究・開発に取り組んでまいります。

【回答者属性】

単位：%



［調査方法］・Web調査 2018年8月実施・有効回答者数600・調査エリア：全国・性別：男女
・年齢：20歳～64歳・11人以上のオフィスで働く有職者・P9を除き複数回答

WORK MILL Research
Vol.0「はたらく」を科学する

発行年月　2018年11月
発　　行　株式会社 オカムラ
企　　画　はたらくを科学する研究所
浅田晴之、上西基弘、牧島満
編集協力　IS Partners
吉田一郎、大川明子
制　　作　株式会社 ランドマーク

WORK MILL

projected by

okamura

workmill.jp okamura.co.jp

YDCD01-8N1 P.LM '18-11